

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 佐々木 真帆美

論文題目 1960年代以降ハリウッド映画における動物表象

論文審査担当者

主 査 名古屋大学教授 松下 千雅子

委 員 名古屋大学教授 星野 幸代

委 員 名古屋大学准教授 金 相美

1. 本論文の構成と概要

人間がもつ動物観は、各時代の社会背景や、動物に関する知識量、動物への共感の度合いなどにより、絶えず変化してきた。過去には、動物が理性や言語をもたないことを理由に、動物を人間より下等であるとみなし、人間は動物をどのように扱っても良いという動物観が主流であった。ところが年月が経つにつれ、人間と動物の間に存在した絶対的な境界は崩れ、人間同様に動物も感情を持つため、動物を人間と平等に扱うべきという動物観に変わっていった。現在では、動物の代弁者として動物保護団体が活発に活動している。動物と人間との差異をどのように捉えるかは時代により異なるものの、動物に対する人間の関心は尽きることがなく、動物は、人間とは異なる存在として、あるいはまた人間に近い存在として、西洋の歴史を通じて繰り返し言及され、表象されてきた。しかし、人間にとって、動物を正しく理解し、表象することは、果たして本当に可能なのだろうか？本論文「1960年代以降ハリウッド映画における動物表象」は、こうした疑問から出発し、人間が動物を正しく代表／表象できるのか、という哲学的問いに答えるために、1960年代以降のハリウッド映画における動物表象を分析している。

そもそも映画の誕生には、動物の動きに対する人間の興味が深く関わっている。映画の原型は、1878年にエドワード・マイブリッジが、馬が駆けているときに、全ての足が地面を離れる瞬間があるのかを検証するために、馬の走る姿を連続して撮影したものだといわれている。そして、その後も、映画にはジャンルを問わず、数々の動物が登場してきた。本論文は、映画の中でどのように動物が表象されているかを考察し、そうすることにより、人間のどのような価値観がそこに投影されているかを明らかにしている。研究対象をハリウッドで制作されたフィクション映画に限定しているが、それはハリウッド映画が観客の動員を狙って作られた商業映画であるために、大衆に受け入れられやすい作品であること、そしてハリウッド映画における動物の表象もまた、大衆のもつ動物観を意識して、大衆に受け入れられやすい形で表現されていると考えられることからである。このように大衆化された動物表象を分析対象とすることは、人間が動物に対して抱く一般的なイメージの投影を分析するという本論文の研究目的に適うものである。

本論文において、学位申請者は、動物が登場するハリウッド映画を、動物絵本における人間と動物の関係の表現方法を考察した矢野智司による分類に従い、動物だけが登場する映画、動物の世界に人間が入っていく映画、人間の世界に動物が侵入してくる映画、一人の人間と一匹の動物とが出会う映画、人間が動物に変わる映画という5つのタイプに分けている。本論文は全5章からなり、各章がこの5つのタイプに対応する形で、タイプ別に映画作品を取り上げ、各作品における動物表象を精査している。ここに、本論文の背景、先行研究、映画のタイプ分けを含めた理論的枠組みを紹介する序章、結論となる終章、引用文献リストが加わる。

本論文では、まず序章において、人間がどのように動物を理解してきたかに関する歴史が考察される。アリストテレスからデカルト、カント、ハイデgger、アガンベンにいたる動物についての言説を振り返り、いかに動物が、人間を中心とする世界の中で周縁化され、「他者」として扱われてきたかが論じられる。そして、キース・トマス、ルソー、ベンサムらによる動物の権利に対する意

識の昂揚が、中心に存在する人間と周縁化された動物という二項対立の暴力性を指摘するジャック・デリダやダナ・ハラウェイ、ジョン・バージャーらによるポストモダニズム的な動物論を経て、キャロリン・マーチャントのエコロジカル・フェミニズムやスピヴァク、サイードのポスト・コロニアリズムに接続されていく過程を概観している。

第1章では、魚の世界を描くことにより人間中心主義的な価値観を批判したアニメ作品『ファインディング・ニモ』(*Finding Nemo*, 2003)を考察している。本章は、『ファインディング・ニモ』が、人間の登場人物の魚に対する行為を魚たちの立場から批判する作品であると認めた上で、そうした批判もまた、生物学的事実を都合よく無視したり、人間のもつ価値観を物語に反映させたりすることによって行われているがゆえに、人間中心主義的価値観を免れていないことを明らかにした。

第2章では、「動物と話せる医者」をモチーフにして制作された『ドリトル先生不思議な旅』(*Dr. Dolittle*, 1962)と1998年以降に制作された『ドクター・ドリトル』シリーズ (『ドクター・ドリトル』 [*Dr. Dolittle*, 1998]、『ドクター・ドリトル2』 [*Dr. Dolittle 2*, 2001]、『ドクター・ドリトル3』 [*Dr. Dolittle 3*, 2006]、『ドクター・ドリトル4』 [*Dr. Dolittle 4*, 2008]、『ドクター・ドリトル ザ・ファイナル』 [*Dr. Dolittle Million Doller Mutts*, 2009]) について、制作当時のそれぞれの社会的時代背景を比較考察している。白人男性中心主義の中で周縁化されてきた女性やアフリカ系アメリカ人の公民権運動が始まった1960年代に作られた『ドリトル先生不思議な旅』では、主人公であるドリトルやその仲間が、動物の代弁者として人間による動物への扱いを批判するが、本章では、そのことを、社会で周縁化された存在に目を向け始めた当時の価値観の反映であると指摘している。一方で1998年以降に制作された『ドクター・ドリトル』シリーズでは、社会問題には重点を置かず、個人が抱える問題の解決がテーマとなっている。1990年代は、文化相対主義やポストコロニアル批評が広まり、白人男性中心主義の中で「周縁化されたもの」としてまとめられた人々の中に存在する差異に注目が集まり、より「個人」に目が向けられた時代であった。このように、『ドリトル先生不思議な旅』も『ドクター・ドリトル』シリーズも、動物について語っているにもかかわらず、そうした語りには結局のところ人間社会が投影されているに過ぎないことを、本章は明らかにしている。

第3章では、サメと人間との戦いを描いた『ジョーズ』(*JAWS*, 1975) が、ジェンダー的視点から考察される。ジェンダーを与えられる前のサメが、未知の存在として恐れられ、対峙することが不可能であったのに対して、作品の途中で「彼」というジェンダーがサメに与えられることにより、一転して闘うことが可能な相手となっていく様子が丁寧に読み解かれている。男性ジェンダーを与えられたサメと男性登場人物たちとの闘いは、男同士の一騎打ちとして描かれ、一見すると平等な関係にあるように思えるとしながらも、ジェンダーを与えるという行為自体が、動物を人間の基準で捉えることにほかならず、そこにもやはり人間中心主義的な価値観が存在していることを鋭く指摘している。

第4章で論じられる『シービスケット』(*Seabiscuit*, 2003) は、人間と動物を平等に扱い、動物が人間と同様に「アニマル・スポーツ」への参加を楽しんでいるかのように描かれた作品である。しかし、その物語は、シービスケットの感情を人間の視点から勝手に語り、シービスケットがもつ競走馬としての資質を引き出してあげたという人間の価値観をシービスケットに強要することによって成り立っている。本章では、このような人間中心主義的権力が、主観ショットやナレーションなどの映画技法によってどのように隠蔽されているかを明らかにしている。

第 5 章で考察を行った『キャット・ピープル』(Cat People, 1982) では、人間が動物に変身することを、ジュディス・バトラーが『アンティゴネーの主張』で行った近親姦についての議論を踏まえ、近親姦に対するタブーとの関連で論じている。黒豹に変身するポールは、妹のアイリーナに性的関係を迫るなど、物語の中で人間にとって理解できないもの、コントロールできないものとして描かれ、人間の規範性を攪乱する「他者」として描かれている。対照的に、アイリーナは、従順な女性として描かれているが、ポールの死後、ポールの他者性は、アイリーナへと受け継がれる。本章は、兄であるポールに対する従順さと、恋人であるオリバーに対する従順さとに引き裂かれたアイリーナが、最後に自らがクロヒョウに変身することにより、獣性と人間性の二律背反を視覚的に体现し、人間の規範性を攪乱したと結論づけている。

人間が動物を語る時、意識するか否かに関わらず、その語りの中には人間がもつ価値観や社会背景が影響する。人間が語る以上、人間が動物に対して抱くイメージを動物に投影させることによってしか、動物を語ることはできない。このような観点から、人間は動物を語ることができないという語りの限界を明らかにした本論文は、人間による動物についての語りをそのまま受け入れることに対する危険性について警笛を鳴らすものとなっている。

2. 本論文の評価

本論文において申請者は、ハリウッド映画における動物表象の分析を通じて、人間の動物に関する語りに反映される、その語り手のもつ価値観や社会・文化的背景に、一貫して光をあて続けた。そして、動物についての語りには、その動物に対して人間が抱いているイメージが投影されているという考察に基づき、人間は動物そのものを語ることができないという結論を導き出した。この結論を、申請者は、サイドがオリエンタリズム論において示した西洋が東洋を正しく表象することの不可能性や、『サバルタンは語るができるか』でスピヴァクが指摘したサバルタン表象の不可能と重なり合わせた。人間／動物の二項対立を、西洋／東洋、男／女の二項対立との類似において論じた手続きは鮮やかで、非常に説得力があった。

一方、本論文には作品の選定と章立てにおいて、次のような弱点も見出された。まず、本論文で章立てに用いた 5 つの分類（動物だけが登場する映画、動物の世界に人間が入っていく映画、人間の世界に動物が侵入してくる映画、一人の人間と一匹の動物とが会う映画、人間が動物に変わる映画）を、本論文で取り上げた映画作品によって代表させることができるか否かという問題。次に、映画の選定理由が明確でないという問題。そして、1960 年代の『ドリトル先生不思議な旅』と 1998 年以降に制作された『ドクター・ドリトル』シリーズを比較した第 2 章をのぞき、歴史的考察が不足しているという問題である。分類に従って分析するのであれば、もっと多くの映画を分析対象とすべきであったし、タイプ別ではなく作品の制作年に従って章立てし、ハリウッド映画における動物表象の歴史的な変遷を辿るという方法もあったという指摘がなされた。

しかしながら、これらの指摘は、論文全体の評価を損なうものではなく、むしろ、申請者の今後の研究活動に役立てるべき点として指摘されたものである。本論文は、動物が登場するハリウッド映画作品を題材に、動物を見る人間の眼差しに焦点を当て、動物表象の不可能性を明らかにした意欲的な論文である。その成果は、映画研究、環境学、アメリカ文化研究に新たな知見を加えるものであり、審査委員は全員一致して、本論文が課程博士を授与されるに値するものであると判断した。